

第3章 西トップ遺跡中央祠堂開口部に関する検討

ソク・ケオ・ソヴァンナラ

1. はじめに

三塔型式の寺院である西トップ遺跡の調査と修復作業から、新たな興味深い事実が判明した。興味深い発見というのは、この三塔の建築の評価と造営過程に関連している。これまでの先行研究における推定では、第1造営期が中央祠堂の内側ラテライト基壇が建立された9世紀後半から10世紀前半、第2造営期が砂岩造三祠堂建造の段階とされていた。この三塔の解体調査をしたところ、三塔は別々の時代に建てられており、この寺院の伽藍の建設には、およそ5つの段階があったと考えられることが判明した。

第1段階

西トップ遺跡で発見された碑文(K.576)によると(1)、ヤショーヴァルマン1世(889A.D. - 910A.D.)の母方の叔父であるシュリー・サマラヴィクラマ(Çrī Samaravikrama)は、ヴィシュヌ神に捧げるために、9世紀後半に寺院を建立したとされる。この寺院とは、中央祠堂内側に存在していたラテライト基壇にあたと考えられる。この寺院の元々の塔はレンガ造(2)で、現存する3層のラテライト基壇上に建てられていたと考えられる。おそらく東面のみ開口し、灰色砂岩製の扉とコロネット(側柱)とリントルで装飾されていた。寺院の塔部分はどこかの段階で倒壊したが、おそらく一部はラテライト基壇上に残っていたのだろう。このラテライト基壇全体は元位置かつ同じ高さを留めている(Fig.1)。

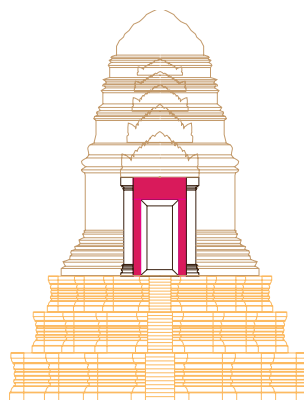


Fig.1 第1段階復元図案

第2段階

第二に、前段階の祠堂の倒壊後に建てられた、現在私たちが目にしている中央祠堂の段階である。灰色砂岩製の塔が先述のラテライト基壇上に(Fig.2)が建立された。その構造は、東西南北にそれぞれ階段を持つ塔として現存している。扉枠やコロネット、リントルなどの装飾材は、赤色砂岩でできている。祠堂は、四方に開口し、これらの扉枠のほとんどは、赤色または淡い黄色の砂岩材で造られているが、2材のみ灰色砂岩製であった。これらの扉枠は明らかに再利用された石材のようであり、4面の扉枠は、赤色砂岩製のコロネットとリントルとのセット関係となっている。上部のペディメントやフロントンには、触地印仏坐像と供養者像があらわされ、ポスト・バイヨン期またはポスト・アンコール期の様式を示している。

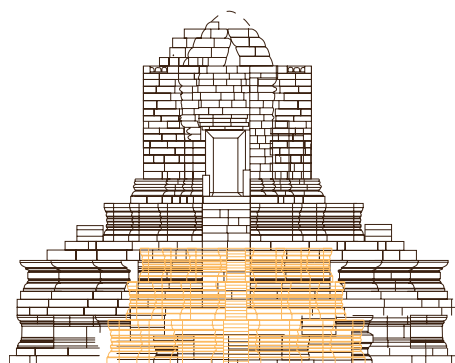


Fig.2 第2段階復元図案

第3段階

次の段階には、中央祠堂下成基壇南階段の上に南祠堂(Fig.3)が建立された。これは修復のため、南祠堂の躯体部・上成基壇を解体し、下成基壇内の発掘調査をおこなった際に、中央祠堂下成基壇の南階段が検出され、構築順が判明

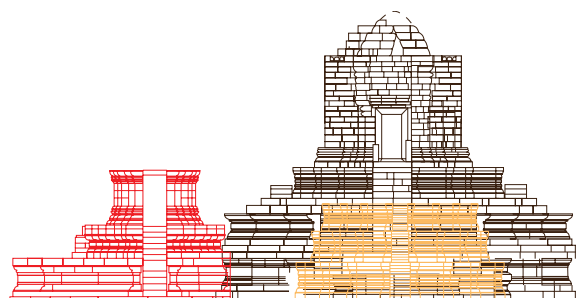


Fig.3 第3段階復元図案

したことによる (3)。南祠堂には1つの開口部しかなく、他の3面は偽扉であった。この南祠堂にはコロネットやリントルは存在しないが、仏坐像があらわされたペディメントが4面に設置されている。

第4段階

続いて、中央祠堂の北側に北祠堂 (Fig.4) が建てられた。この祠堂の基壇内の状態から判断すると、中央祠堂下成基壇北階段を切断して撤去した後、北祠堂下成基壇の部材を積み上げ、中央祠堂下成基壇と連結させたようである。ところで、この北祠堂下成基壇内部とその地下の発掘調査では、砂で満たされたほぼ立方体の形をしたレンガ造りの地下室 (4) が新たに発見された。この埋土中には、異なる種類の金属片やガラスビーズ、人骨と思われる骨片などが検出された。放射性炭素年代測定結果から、この北祠堂の年代は14世紀末から15世紀初頭と推定されている (5)。

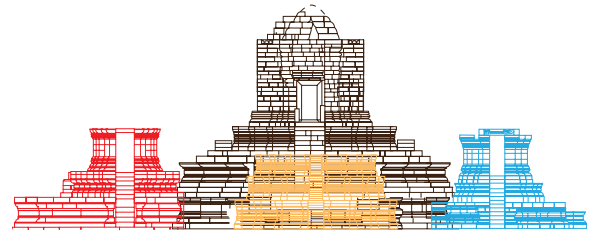


Fig.4 第4段階復元図案

第5段階

最後に、中央祠堂の東側に新たに上座部仏教のテラスが追加された。このテラスは、おそらく木造で、黒褐釉瓦で覆われていたと思われる (6)。

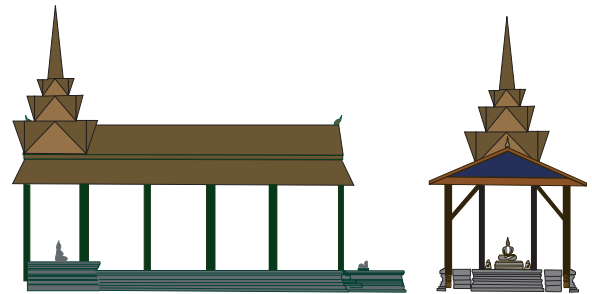


Fig.5 仏教テラス想定図案

西トップの寺院の変遷はこのように大変に複雑である。もう一つの問題は、扉枠、コロネット、リントルの赤色砂岩部材についてである。この点に関連していくつかの疑問が出てくる。これらは、9世紀、10世紀の西トップの前身寺院に属するものなのか？それとも、周辺の他の寺院のもので、灰色砂岩の祠堂を建立するために持ち込まれたものなのだろうか？それとも、灰色砂岩の祠堂建設と同時に作られたものなのか？これらの疑問は、いずれもまだ説明が難しい問題である。しかし、これらの赤色砂岩については、ある程度の調査・観察は可能である。

2. 中央祠堂の石材

中央祠堂の開口部は、扉枠、コロネット、リントルの3種類に分類することが可能である。

2.1. 扉枠

中央祠堂には、東西南北各方向に扉枠が存在する。それぞれ4部材から構成されており、合計16点の扉枠材がある。これらの扉枠はほとんどが赤色またはピンク色の砂岩材で作られているが、南面扉枠の下枠材と北面扉枠の上枠材のみは灰色砂岩である。また、これらの扉枠の各部材のサイズや高さは均一ではない。これらの部材を注意深く詳細に観察することができたため、以下にその詳細を記す。

2.1.a. 東面扉枠 (Fig. 6)

東面扉枠はすべて赤色またはピンク色の砂岩で構成されている。下枠材、左右の垂直枠材、上枠材の4つのブロックで構成されている。左右



Fig.6 東面扉枠 (仮組中)

の扉枠材は、ほぼ同じ高さ・厚さである。下枠は長さ・厚みともに短い、幅は左右枠・上枠よりも広い。その内側には、木製扉と木杭のために開けられたほぞ穴が2か所切り込まれている。上枠材に関しては、下枠材よりも長く、もともとこの枠の北西端は、右側の垂直枠に取り付ける以前に既に折れていたものとみられる。我々の再構築作業時にも東面扉枠の4部材は、互いに連結部の端部もほぼ完全に固定されていたので、この4部材は同時に製作され、設置されたとと思われる。

2.1.b. 西面扉枠 (Fig. 7)

西面扉枠の4部材は赤色砂岩で作られている。左右の垂直枠は高さ・幅・厚みが同じである。下枠に関しては他の部材よりやや薄いものの、幅は広がっている。上枠の厚みは、南側と北側で異なっていた。この4つのパーツを再構築したところ、他の3か所の隅は位置正しく納まっているにもかかわらず、扉枠上部南隅が完全には固定されないことが判明した。上枠の南端部と右垂直枠の上端部の間に小さな隙間が生じるのである。これはオリジナル部材製作時の誤差か、別の扉枠を再利用したために生じた誤差である可能性が考えられる。



Fig.7 西面扉枠（仮組中）

2.1.c. 南面扉枠

南面扉枠の4部材は、左右枠・上枠は赤色またはピンク色砂岩製であるが、下枠は灰色砂岩製である。これは、赤色砂岩の枠材が3つ同時に作られ、下枠材のみ破損または欠損などの理由であたらしく灰色砂岩製で製作されたことを示していると考えられる。さらに、灰色砂岩は非常に大きく、また厚みもあるものの、その材質は非常に悪く、脆い。我々の解体前に既に、多くの小さな破片に割れている状態であった。この4点の扉枠材を再構築したところ、左枠と上枠が完全には固定されておらず、上枠が約2cmの隙間が生じていることが判明した。

2.1.d. 北面扉枠 (Fig. 8)

北面扉枠は5部材からなる。左右枠は赤色砂岩製で、サイズは同じである。下枠は2部材からなり、淡い黄色の砂岩でできている。この2部材からなる下枠は、左右枠のほぞに固定されないことから、作り替えられたものかまたは再利用されたもので、左右の垂直枠と連結させているように見受けられる。ほぞの大きさよりも切り込みが大きいため、施工者は切り込みとほぞの隙間を固定するために、礫やキーストーンなど小型の石材を詰め込まなければならなかったようである。



Fig.8 北面扉枠（仮組中）

実際、この隙間にラテライトの小さな礫が入れられているのを発見した。もう一点注目すべきは、我々の修復前に、この下枠2部材のうちの西側の部材がその先端で破損しており、その箇所に、別の部材を追加して補修されていた点である。また、北面扉上枠材は南面扉の下枠材と同じく灰色砂岩製であった。この灰色砂岩材は非常に脆く破損しやすいため、一部欠損していたが、修復により当該材を再び使用することが可能となった。

2.2. コロネット (Fig. 9)

中央祠堂には各4面に2本ずつ、合計8本のコロネットが存在する。1924年のEFEO（フランス極東学院）の古写真(EFEO_CAM01477, 01484, 01489, 01496)によると、これらのコロネットはすべて原位置を留めていることが判明している。その後、塔は樹木や人の手によって損傷を受けたものとみられ、中央祠堂の東、西、北側の一

部が崩壊し、コロネットも部分的に破損した。1994年には、北側から2点、東側から2点の計4点の破損したコロネット材が収集され、シェムリアップ市内のアンコール保存事務所に収蔵された（Inv.312、Inv.332、Inv.333a、Inv.333b）。2020年10月には、これらのコロネット材を修復し、全てのコロネット材を原位置へと戻し、寺院を再構築するために、石材の返還をカンボジア文化芸術省に申請した（第1章第3節参照）。なお、この8本のコロネットは、明らかに大きさが違うようである。東面と西面のコロネットは同じ直径（0.185m × 0.185m）で、北面と南面のコロネットはより大きくて高い（0.22m × 0.22m）。

2.2.a. 東面コロネット

東面の二本のコロネットは赤色砂岩でできており、高さ約1.70m、幅約0.185mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈す。七面体のうち、扉枠と躯体部壁面に接する2面は無装飾であるが、他の5面に関しては装飾が施されている。南側のコロネットは3面のみに装飾、北側のコロネットは5面に装飾が施されている。

2.2.b. 西面コロネット

西面の2本のコロネットは淡い黄色の砂岩でできており、高さは約1.74m、幅は0.185mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈す。東面同様、扉枠と躯体部壁面に接する面は無装飾であるが、他の5面には装飾が施されている。この二本は同じ場所で作られたか、あるいは同じ場所から持ち込まれたものであると考えられるが、南側の柱は下部で折れて切断され、最終的には新たに接続部を追加してから設置されたものである。

2.2.c. 南面コロネット

南面の2本のコロネットは薄紅色の砂岩でできており、高さ約1.86m、幅約0.22mを測る。東側のコロネットの下部は断面四角形、本体は断面七角形を呈す。一方、西側の柱は断面八角形を呈す。扉枠と躯体部壁面に接する面は無装飾であるが、他の5面には装飾が施されている。

2.2.d. 北面コロネット

北面の2本のコロネットはピンク色の砂岩製で、高さ約1.81m、幅0.21mを測る。柱の下部は断面四角形、本体部は断面七角形を呈している。扉枠と躯体部壁面に接する面は無装飾であるが、残る5面のうち3面にのみ装飾が施されている。



Fig.9 東面コロネット
(一部)



Fig.10 西面コロネット



Fig.11 南面コロネット



Fig.12 北面コロネット
(一部)

2.3. リンテル

中央祠堂には全部で4点のリンテルが存在している。そのうち南、東、西面の三点は赤色砂岩製で、北面リンテルは薄黄色の砂岩でできている。しかし、北側のリンテルの表面には何らかの赤色塗料が塗られていたものとみられる。この四点のリンテルに描かれるモチーフは、本来のヒンドゥー教の神々が配置されるべき方角に合致していないことから、この中央祠堂建立時に再利用ないし再配置されたものと考えられる。

2.3.a. 東面リンテル (Fig. 13)

東面リンテルは、長さ 1.47m、幅 0.40m、高さ 0.49m を測る赤色砂岩で作られている。南辺は長さ 0.07m、幅 0.29m、高さ 0.20m の稜線が残っている一方、北側は直線を呈している。リンテルの北西の端は元々欠損しており、解体調査前に失われている。リンテルの正面には、プレ・ループからバンテアイ・スレイ様式までにあたる装飾が施されている。中央部には、本来は常に北の方角を司るクベラ神が馬の上に坐す図像があらわされている。



Fig.13 東面リンテル

2.3.b. 西面リンテル (Fig. 14)

西面リンテルは赤色砂岩で作られているが、当リンテルは3つほどに割れて破損したため、本来の大きさは不明である。リンテル中央部分は 1994 年頃に盗まれたとみられ、残りの2点（左部分、右部分）はアンコール保存事務所により収集され保存されている。これらの2点のサイズは、長さ 0.50m、幅 0.41m、高さ 0.42m 程度である。



Fig.14 西面リンテル (一部)

2.3.c. 南面リンテル (Fig. 15)

このリンテルは、解体調査前まで原位置を留めていた部材である。長さ 1.32m、幅 0.465m、高さ 0.425m の赤色砂岩で作られている。中央部には、獅子の上に座って右手に棍棒または剣を持した神像が表されており、ケトゥ（Ketu）神であると考えられる。



Fig.15 南面リンテル

2.4.d. 北面リンテル (Fig. 16)

EFEO の古写真によると、撮影当時には北面リンテルはまだ完全な形で残っていたが、おそらく 1994 年以前に破壊または落下により割れたとみられ、真ん中の部分はおそらく盗難により失われている。現在、残った部材を回収して修復を試みている。当リンテルは

淡い黄色または黄色がかった灰色の砂岩製で、長さ約 1.57m、幅 0.39m、高さ 0.52m で、他の 3 面のリントルよりも大きい。残存箇所には象の耳が表されていることを確認した。古写真との比較から、リントル中央部には象に坐す神像が表され、この神像は本来は東の方角を司るインドラ神であると考えられる。



Fig.16 北面リントル

3. 問題点

中央祠堂は、前身寺院の塔の倒壊後に建てられたことが既に判明していた。中央祠堂の全体構造やペディメントにみられる図像は、仏教寺院に關係するものであり、特にポスト・バイヨン期やポスト・アンコール期に比定できる。しかし、扉枠やその周辺の部材は別の寺院のもので、現在ある中央祠堂に転用されているようである。そのため、この事象を理解するにはいくつかの問題があるといえる。すなわち、これら扉枠周辺の部材は、中央祠堂と同時に作られたのか？もしそうでないならば、それらはいつ、どこに属していたか？この件に関しては、部材で確認することが可能である。

3.a. 扉枠

各方向の扉枠のセットごとに、必ずと言っていいほど隙間補完に関連した問題が生じている。これらは、同時期に、同グループ、同セット関係で作られたものではないように見受けられる。他寺院の扉枠と比較検討すると、通常であれば、一組の扉枠（4つのブロックからなる）は、一定の大きさと角度でカットされ、また、切り欠きやほぞ穴とも合わさるように製作されるものである。

3.a.a. 東面扉枠 (Fig. 17)

東面扉枠を再設置したところ、北側垂直枠材の高さに問題があることが判明した。垂直枠材と下枠の間には隙間があった。解体前調査で、この隙間に小さな礫や砂岩チップで充填されていたことを確認している。しかし、これら四つの枠材は完全に固定することができた。

3.a.b. 西面扉枠 (Fig. 18)

西面扉枠の取付部を見ると、上枠南縁隅を除き、3隅は完全に固定されていたことが判明した。これは、3本の扉枠（左右垂直材2本、下枠1本）は同一セットまたはオリジナルの組み合わせであり、上枠材のみは別材を使っていたと推定される。

しかし、この4点の扉枠材は組み合わせることができた。そのため、この西面扉枠製作時に上枠材を切断したのは、他にも理由がある可能性が残る。

3.a.c. 北面扉枠 (Fig. 19)

北面扉枠の上枠材と南面扉枠の下枠材は灰色砂岩材で作られていたのに対し、その他の扉枠部材は赤色砂岩製であった。この2点の灰色砂岩の扉枠材は、他の枠材よりも大きく厚みを持つ

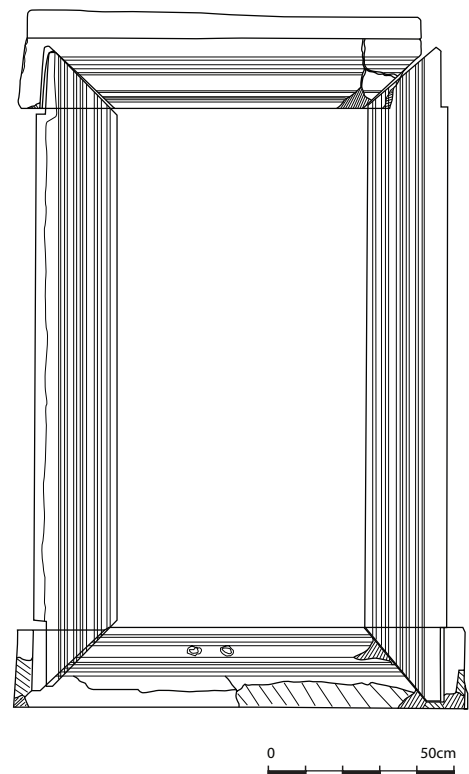


Fig.17 東面扉枠実測図

ている。このことから、この2点の灰色砂岩の杵材は、おそらく破損した赤色砂岩に替えて、新たに作られたことを示唆している。北面扉杵の上杵材に関しては、切り詰めたうえで両垂直材と組み合わせているが、装飾面に関してはノミで削り、斜めに傾斜させることで東側のコロネットとリンテルの高さに合わせるように調整している。

もう1点は、北面扉杵の下杵材に関してである。通常、各扉の下杵材はひとつの部材からなるが、北面扉の下杵材は2点の部材で構成されている。また、西側の部材の南東隅に関しては、設置前に欠損していたものとみられる。この点に関しては、破損部分の補修箇所が存在によって判明した。もう1つの問題は、西側の部材の切り込みにに関してで、この切り込みは垂直材のほぞよりもサイズが大きいという点である。垂直材を安定させるために、切り欠いたほぞ穴とほぞの隙間にラテライト片が充填されていた。

3.a.d. 南面扉杵

南面扉の下杵材は灰色砂岩で作られていたが、他3点の杵材は赤色砂岩製であった。先に述べたように、これは下杵材が後から製作されたものであったことを示しており、厚みはあるが、他に比べて非常に脆く、砂岩の質が粗い。このため、当部材は多くの破片に破損し、剥離していた。

解体後、改めて確認をしたが、当下杵材は再構築には使用せず、新材に交換することとした。西側の垂直材は、東側の垂直材より若干長いものの、下杵材の西側の穴を若干調整することで納まりを解決することが可能である。

3.b. コロネット

中央祠堂には8本のコロネットが存在するが、それらはすべてが同じサイズではない。明らかに、東面開口部と西面開口部のコロネットは同じ幅、奥行きであるが、高さが異なっている。南面開口部と北面開口部のコロネットは同じサイズであるが、東面、西面のものよりも大きい。また、柱の角の大きさや数に関してもすべて同一というわけではない。

通常、コロネットは頂部、胴部、下部の3つに分けられる(Fig.24)。東面、西面、南面のコロネットはオリジナルの大きさと各部位も残っているが、北面コロネットに関しては、扉杵の高さと平行になるように頂部を切った痕跡が残る。

興味深いことに、我々の解体調査の際に、西面南側のコロネットは、設置以前に補修されていたことが判明した。また、当コロネット下部は、おそらく何らかの原因で折れ、高さ約38cmの別の部材が付け足されていた(Fig. 20)。上側のオリジナル材の下端にはほぞ穴を開け、新しい部材はその上端にはほぞをノミで成形することにより、双方を合体させているようである。

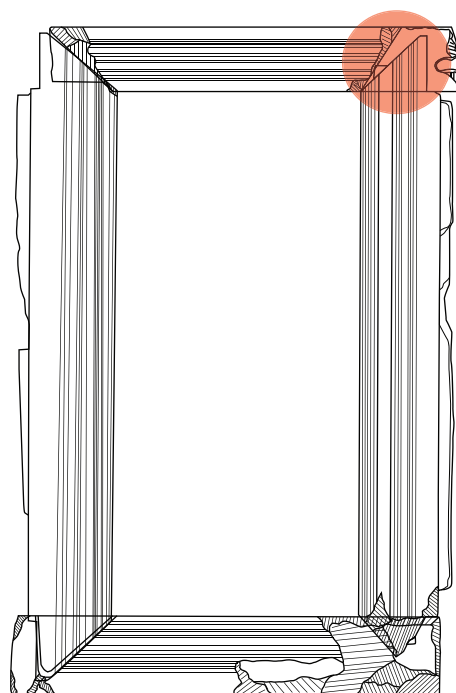


Fig.18 西面扉杵実測図
(赤色部分は接合時の固定が完全ではない箇所)

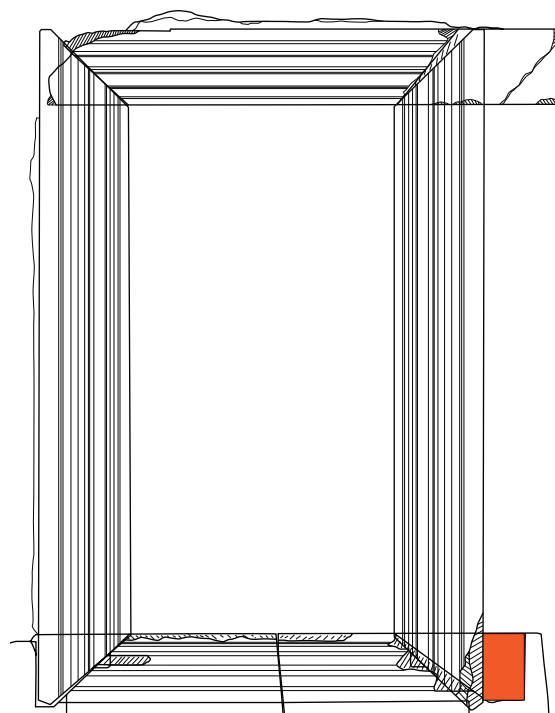


Fig.19 北面扉杵実測図 (赤色部分は設置前欠損箇所)

3.c. リンテル

各4面の開口部にそれぞれリンテルが設置されているが、これらのリンテルは同じ大きさではない。一般的に、一塔を設計する際に、開口部の大きさは常に一定のサイズで設計されている。しかし、この中央祠堂では、すべての要素が不規則なサイズや方角を変更し、再利用されているようである (Fig. 21)。この再利用時の混乱というのは、リンテルにあらわされた神像の機能と方位性とも関連している。通常、象の上に坐す神像はインドラであり、東の方向に配置されなければならない。しかし、中央祠堂では、インドラ神があらわされたリンテルは北面に配置されている。これは本来的には誤った配置となる。つまり、誤った理解によるものまたは、当時の建設者たちが以前のリンテルの機能に関心を持っていなかったことに由来するのであろう。反対に、東側リンテルには北を司るクベラ神があらわされている。南側のリンテルには、獅子の上に座るケトゥーと思われる神像があらわされているが、クメール美術ではリンテルに彫られていることはほとんど見受けられない。通常、南の方角を司る神はバッファローの上に坐すヤマ神である。

4. 美術史的研究

上述のこれらの問題の答えを見つけるためには、まず、その芸術と様式との関係性に焦点を当てる必要がある。これは、リンテルやコロネットの様式についても同様である。以前、フランス人研究者がこれらのリンテルの研究を行い、その第一の結論は、基本的にバンテアイ・スレイ様式に比定できるとし、リンテル、コロネット、扉枠などは当様式に該当すべきものや装飾が確認できる。

4.1. リンテル (Fig. 22)

- 上端の欠落 (図中①)
- 下端の欠落 (図中②)
- 中央のメダイオンから外側に向かって弓なりの弧を描いて、ハンサ (白鳥またはガチョウ (訳註)) の尾としてあらわされる (図中③)
- ライオンの頭から、花房を吐き出す (図中④)
- 花綱がカタツムリの殻のようにまわる (図中⑤)



Fig.20 西面開口部南側コロネット

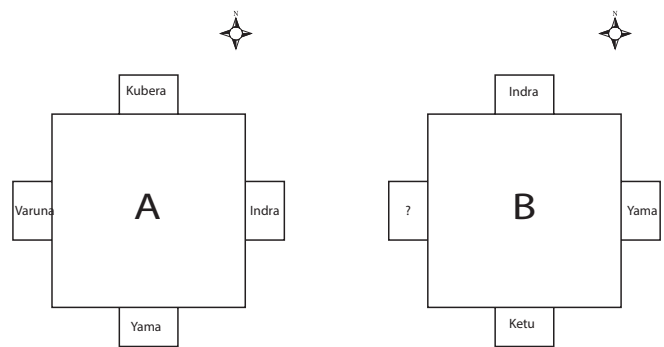


Fig.21 ヒンドゥー教モチーフのリンテルの配置

A: 通例、B: 西トップ

Lintel of Western Top



Lintel of Banteay Srei



Fig.22 西トップとバンテアイ・スレイのリンテルの比較

- 中央部で弓なりの弧の先端でリング状のマクタ（冠）で結われている（図中⑥）

4.2. コロネット (Fig. 23)

西トップ寺院とバンテアイ・スレイ寺院のコロネットにはいくつかの類似点がある。

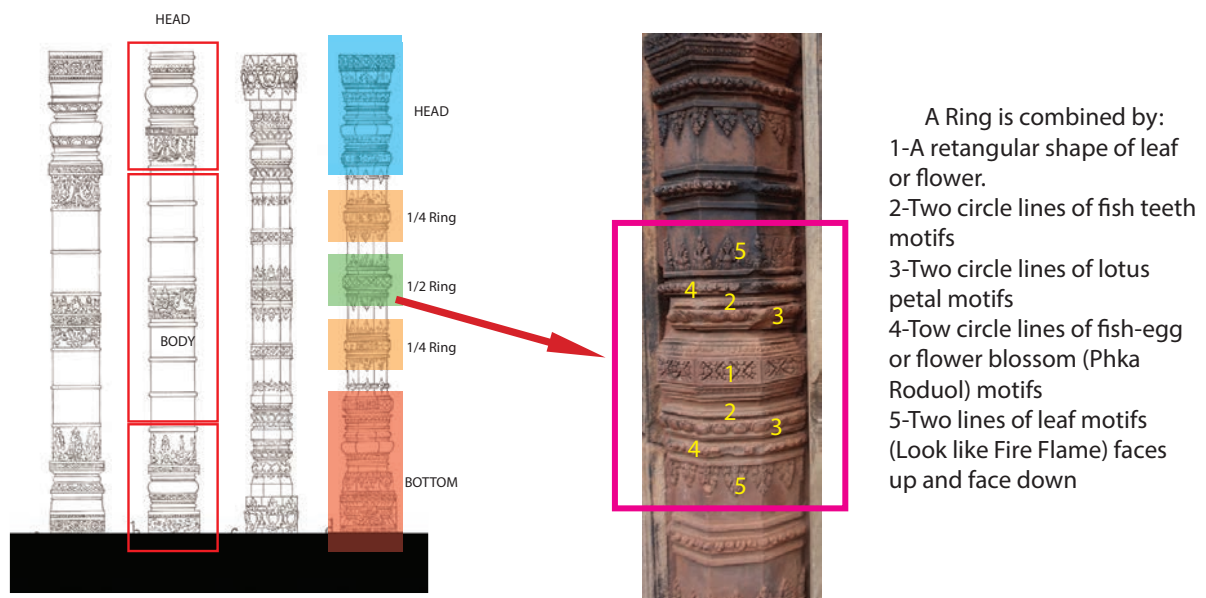
- ほとんどのコロネットが7面または7ヶ所の角を持つ
- コロネットは頂部、胴部、下部の3パートに分かれる
- 頂部は、蓮の花弁と魚卵のモチーフで装飾された複数の帯状に装飾される
- 胴部は、帯状の装飾を境に3つの部分に分かれる
- 帯状装飾では、菱形の花文様帯、2条の花蕾文、下向きと上向きの葉文帯各1条が巡らされる
- 頂部と下部は同じ文様で装飾されている
- 下部は断面四角形を呈し、龕内に祈りを捧げる人物像があらわされている



Fig.23 西トップとバンテアイ・スレイのコロネットの比較

5. 結論

本稿は、これらの部材に関する概報であり、また初歩的な研究である。今後更なる調査を進めることによって、当該石材の機能や由来を本質的に追究することができるだろう。また、赤色砂岩部材と中央祠堂全体の構造に関する確固たる建築過程の解明には、より多くの証拠が必要である。しかし、これらの赤色砂岩部材の由来を特定する



(Black Drawing: J. Boisselier (1966), Le Cambodge, Tome I, Paris, p.161.)

Fig.24 コロネット装飾概要

ために使用できる情報はほとんどないということもまた事実で、以下のような疑問が生じる。

1. 9 世紀、10 世紀の前身寺院のものだったのか？

これらの部材はおそらく 9 世紀や 10 世紀の前身寺院に属するものではなかったであろうと言える。なぜならばそれは、かつての前身寺院の塔が事故的に、あるいは自然に崩壊した場合には、扉枠が完全な形を保ったまま倒れることはないと考えられるからである。また、特にリントルに言えるが、元位置から取り外し、別の方向に変えることも考えにくい。北側のコロネットに関しても同様で、扉枠の高さに平行に切断されることはない。

2. 元々これらの部材は、周辺の他の寺院に属していたものであり、灰色砂岩の中央祠堂建立時に使用するために持って来られたのか？

この点に関しては可能性があると言えるだろう。アンコール・トム周辺にはいくつかの寺院跡がある。これらの寺院は既に崩壊しており、扉枠周辺の石材は赤色砂岩である。例えばアンコール・トムの城壁の北西約 3km に位置するプラサート・スラオ（スラオ寺院）などがそれに該当する。4 面の開口部を持つ祠堂 1 基を建設する際、建立者は幅や高さなどがそろった開口部を建立する必要があるだろう。しかし、西トップ中央祠堂の扉枠材は先述の通り、おおよそ異なっているのである（扉枠材の詳細は Fig. 25 ～ 36 を参照）。

3. 灰色砂岩の中央祠堂の建設と同時に作られたのか？

北面扉の上枠材と南面扉の下枠材の 2 点の灰色砂岩のブロックに関してのみ、欠損または崩壊した元の赤色砂岩製枠材の代わりに中央祠堂と同時期に製作されたのではないかと考えられる。

4. これらの赤色砂岩材はバンテアイ・スレイ寺院に属するものか？

それは不可能な考えであるが、それは確認することができる。バンテアイ・スレイ寺院の中でもいくつかの建造物は既に倒壊しており、扉枠、窓枠、リントル、柱材やペディメントなどのいくつか石材、寺院から取り除かれたかまたは何らかの理由で消滅しているものがある。

いずれにしても、上記はこれらの赤色砂岩材の考察に関する現段階での主要な仮説である。これらの問題点を解決するためのより有効な情報を提供できるよう、今後の研究を進展させていく予定である。

参考文献

- 1 Louis Finot, *Inscription du Temple 486*, BEFEO, Tome XXV, Paris, 1925, p. 307-309.
- 2 Lunet de Lajonquière, *Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge*, Tome III, EFEO, Paris, 1911, p.74.
- 3 奈良文化財研究所、2014『西トップ遺跡調査修復 中間報告南祠堂解体編』p.40-46
- 4 奈良文化財研究所、2017『西トップ遺跡調査修復 中間報告 4 北祠堂解体編』
- 5 奈良文化財研究所、2018『西トップ遺跡調査修復 中間報告 5 北祠堂レンガ遺構編』
- 6 Sok Keo Sovannara, 2017, "Draft Introduction to the Primary Study of Brown Glazed Roof Tiles of Western Top Temple",『西トップ遺跡調査修復 中間報告 4 北祠堂解体編』 p.23-35.

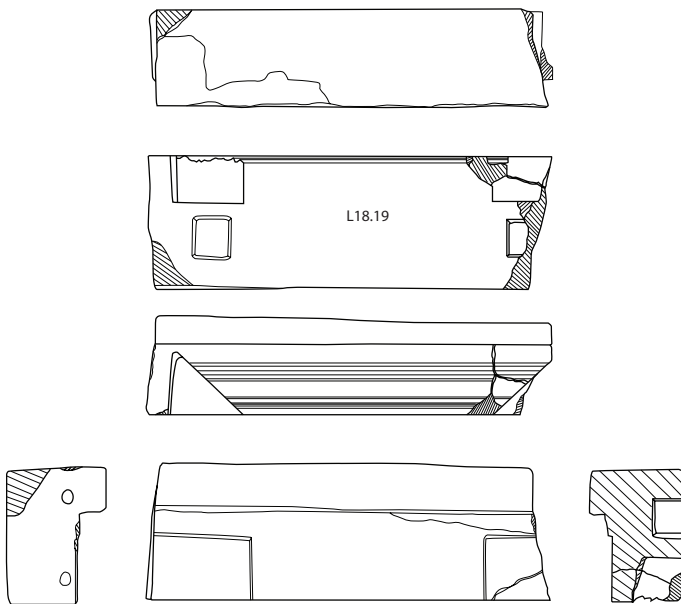


Fig.25 東面扉・上枠部材

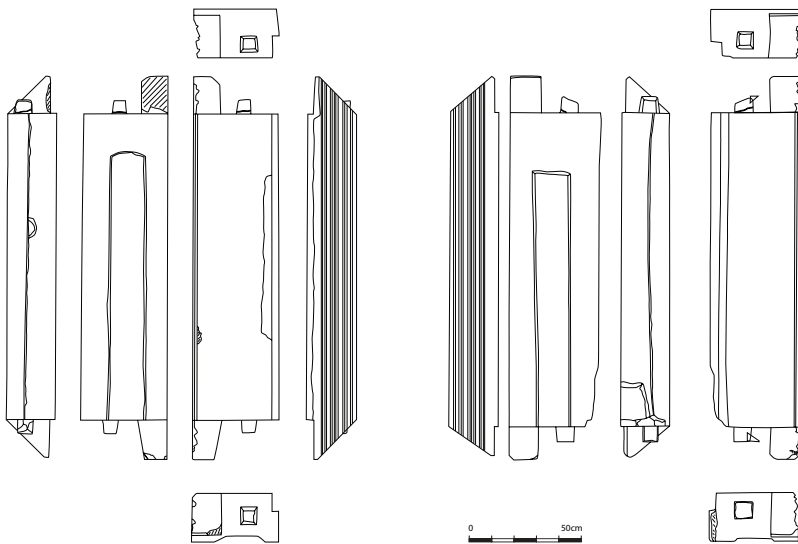


Fig.26 東面扉・垂直枠部材

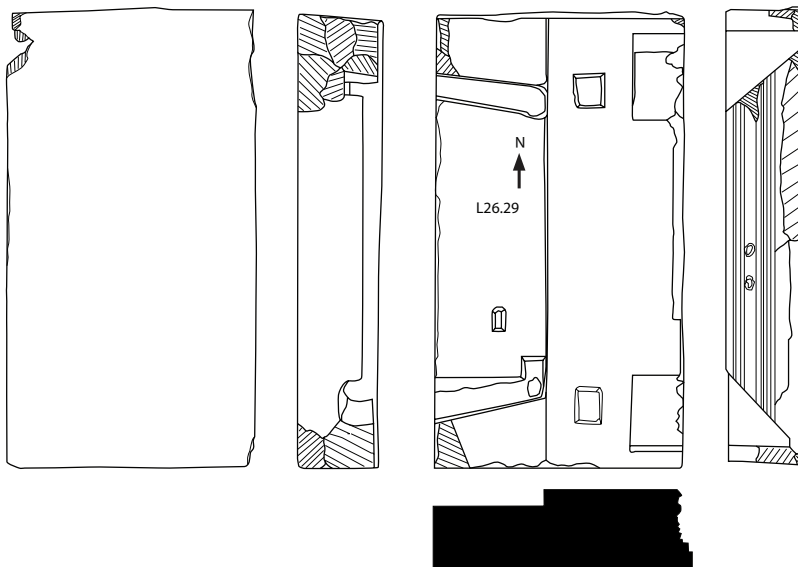


Fig.27 東面扉・下枠部材

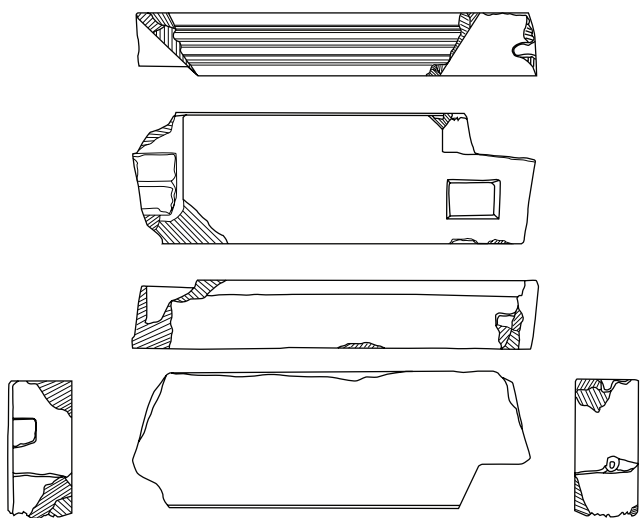


Fig.28 西面扉・上枠部材

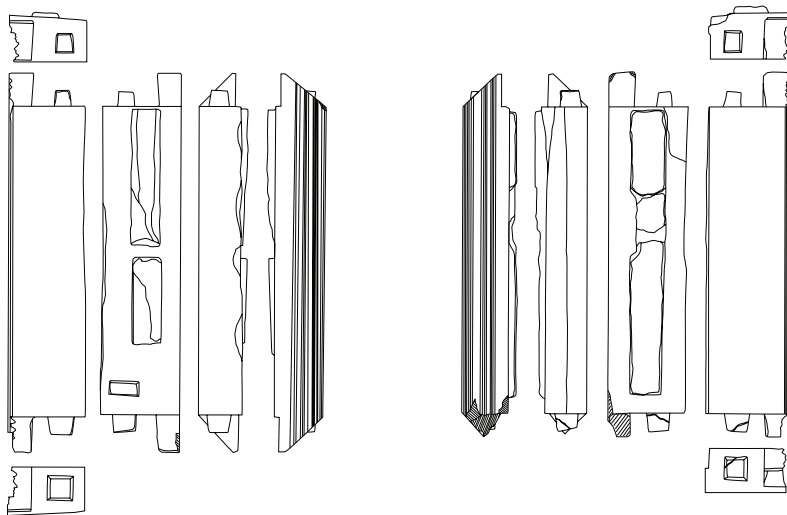


Fig.29 西面扉・垂直枠部材

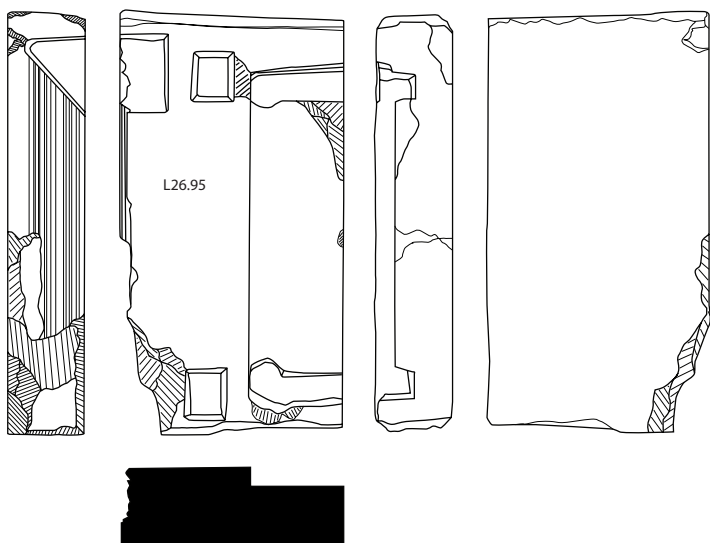


Fig.30 西面扉・下枠部材

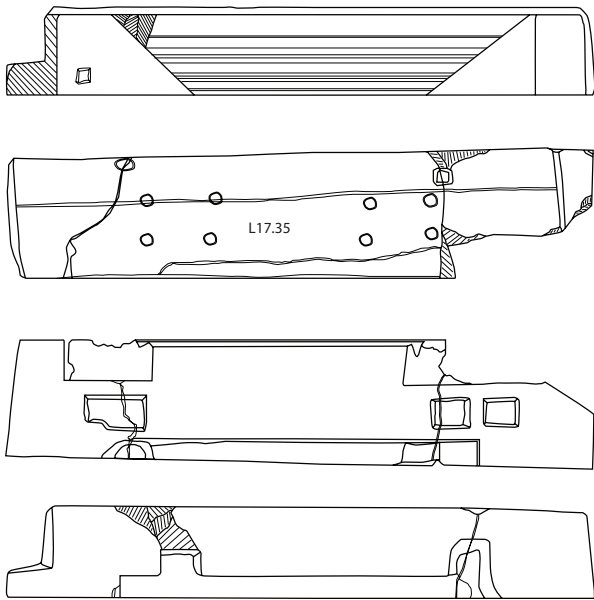


Fig.31 北面扉・上枠部材

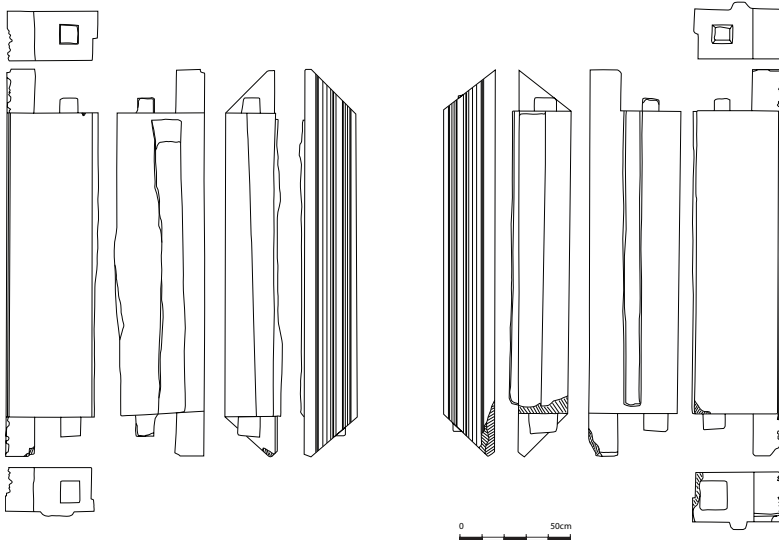


Fig.32 北面扉・垂直枠部材

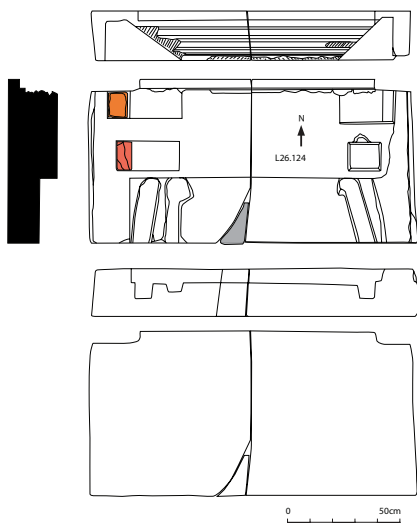
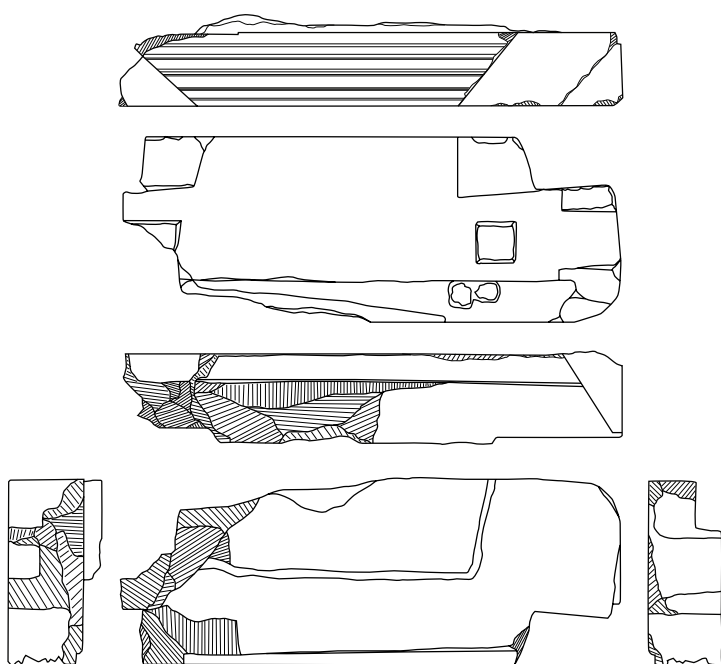
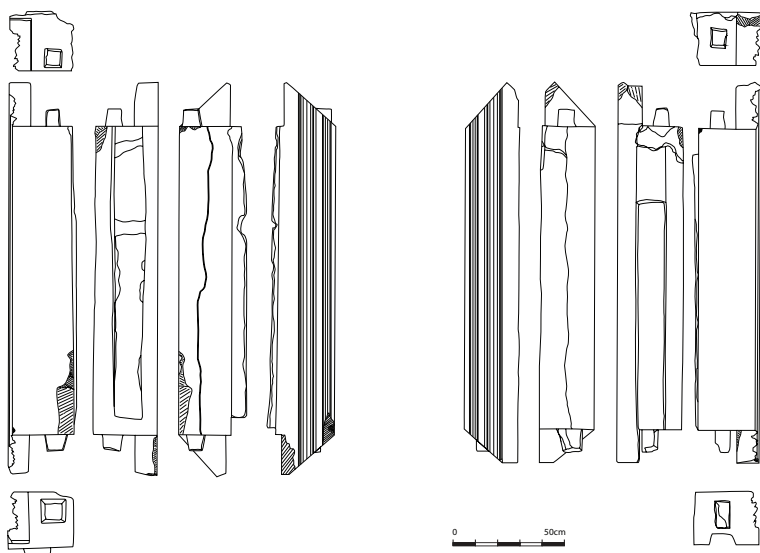


Fig.33 北面扉・下枠部材



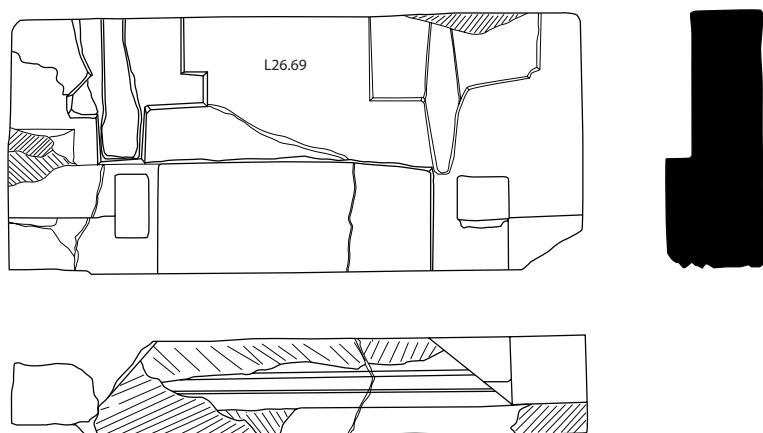
0 50cm

Fig.34 南面扉・上枠部材



0 50cm

Fig.35 南面扉・垂直枠部材



0 50cm

Fig.36 南面扉・下枠部材